第3章　母親のかかわり

第1節 ＊ 母親の養育態度と働きかけ

田村徳子

幼児期から小１生を通して、母親は子どもの健康としつけ、友達とのかかわり、子どもがやりたいことに配慮していた。生活習慣やマナーに関する働きかけの頻度が高い一方、思考をうながす働きかけはやや低い傾向だった。学習については学年によって、かかわる内容が変化した。

幼児期から小１生の子どもに、母親はどのような接し方をしているだろうか。養育態度の様子と子どもへの働きかけを聞いた。

１．子どもの健康としつけ、友だちとのかかわり、子どもがやりたいことに配慮

まず、養育態度についてみていく。本調査では20項目について、「とてもあてはまる」から「ぜんぜんあてはまらない」までの４段階で回答してもらった。

表３－１－１は、「とても＋まああてはまる」を年少児で多い順に並べたものである。全体的な傾向として、学年による差は少なかった。すべての学年で９割以上の母親が「とてもあてはまる」あるいは「まああてはまる」と回答した項目は、「子どもの健康に気をつけている」、「子どもが悪いことをした場合、しかっている」、「友だちと仲良くするように教えている」、「子どもがやりたいことを尊重し、支援している」だった。一方、どの学年でも２割以下だった項目は「私がやってはいけないと言ったことを子どもがしたとき、黙ってみている」だった。

幼児期から小１生の時期、母親の子どもに対する養育態度は、健康やしつけ、友だちとのかかわり、子どもがやりたいことの尊重と支援といったように、多面的に細やかに気を配る傾向があるといえよう。

２．子どもを手伝うことから、子どもの意見や要望の尊重へ

子どもの属性によって、養育態度は異なるだろうか。男女差はみられなかったが、学年による差がみられた。

子どもが成長するにつれて減るのが「子どもが何かをするとき、できるように手伝っている」だった。年少児51.9％＞年中児45.4％＞年長児42.8％＜小１生45.0％と、年少児から年長児にかけて9.1ポイント減少していた。一方、増えるのが「何事にも子どもの意見や要望を優先させている」で、年少児40.8％＞年中児40.3％＜年長児43.4％＜小１生48.7％と年長児から小１生にかけて5.3ポイント増加した。子ども自身でやってみたいことが増える時期に、母親は子どもの成長に合わせて、子どもが実践する機

表３－１－１　母親の養育態度（学年別）

（%）

	年少児（1,366）	年中児（1,223）	年長児（1,125）	小１生（1,285）
子どもの健康に気をつけている	98.9	98.9	98.5	98.8
子どもが悪いことをした場合、しかっている	96.7	97.9	97.2	98.2
友だちと仲良くするように教えている	95.9	95.6	94.4	96.2
子どもがやりたいことを尊重し、支援している	91.8	90.0	91.8	93.1
子どもを傷つけるような言動をした場合は、子どもにあやまる	89.7	87.8	87.0	84.8
子どもにさまざまな体験をさせるようにしている	82.8	83.1	83.5	84.2
しかるとき、子どもの言い分を聞くようにしている	82.5	82.0	81.9	84.4
子どもが自分でやろうとしているとき、手を出さずに最後までやらせるようにしている	81.9	82.8	85.8	82.1
子どもが何をしたいのかを把握している	79.3	79.2	80.8	78.4
どんなことでも、まず子どもの気持ちを受け止めるようにしている	77.6	75.9	77.3	79.6
小学校入学までに読み書きができるようにしている（年少児～年長児）／子どもが学習習慣を身につけるようにしている（小１生）	69.7	77.8	84.8	84.1
私が決めたことに対しては，子どもに従わせている	63.4	63.0	63.6	64.6
しかるよりもほめるようにしている	62.1	54.3	54.1	51.0
子どもが何かをするとき、できるように手伝っている	51.9	45.4	42.8	45.0
いやなことがあっても、がまんするように教えている	48.2	53.2	51.9	53.2
指図せずに、子どもに自由にさせている	45.4	43.8	44.7	40.0
子どもに、何事もどんなふうにしたらよいかを、細かく教えている	45.2	46.3	46.3	50.9
何事にも子どもの意見や要望を優先させている	40.8	40.3	43.4	48.7
私が一緒にいてあげないと、子どもは自分のことができないのではないかと心配になる	16.8	17.5	19.2	21.5
私がやってはいけないと言ったことを子どもがしたとき、黙ってみている	13.0	12.4	13.0	12.4

注１）「とても＋まああてはまる」の%。
注２）（　　）内はサンプル数。

会を増やす様子がうかがえる。また、「小学校入学までに読み書きができるようにしている」は年少児から年長児までの母親に聞いた項目だが、年少児 69.7％＜年中児 77.8％＜年長児 84.8％と、年少児から年中児にかけて 8.1 ポイント、年中児から年長児にかけて 7.0 ポイント増加していた。

３．幼児期の子どもへの働きかけは、生活習慣やマナーが多く、学習面は学年により内容が変わる

幼児期に母親の子どもへの働きかけは、どのくらいの頻度で行われているだろうか。本調査では 27 項目について、「よくある」から「ぜんぜんない」までの４段階で回答してもらった。

表３－１－２は、「よく＋ときどきある」の結果をカテゴリーごとに並べたものである。幼児期の全体的な傾向として、家庭での学習支援以外、学年による変化はみられなかった。

母親の９割以上が行っていたのは、「生活習慣・マナー」の「子どもが夜決まった時間に寝るようにうながしている」、「食事のマナーを教えている」、「まわりの人に『おはよう』『ありがとう』などのあいさつやお礼をするようにうながしている」、「レストランなどの公共の場で子どもがさわぐとき、注意している」、「体験」の「子どもと一緒に買い物に行く」、「家で季節の行事をしている」、思考のうながしの「子どもが失敗したとき、励ましのことばをかけている」、「子どもの『どうして、なぜだろう』などの質問に答えている」、「家庭での学習の支援」の「家では子ども１人で自分のものを出したりしまったりしやすいように配置している」だった。

学年による変化が目立ったのは「家庭での学習の支援」の項目だった。学年があがるにつれて減るのは「子どもと一緒に絵をかいたり、粘土や折り紙で遊んだりしている」、「子どもとブロックやつみ木などをしている」、「子どもと知育玩具を使って何か学習するような遊びをしている」など物を使ったかかわりだった。一方、増えるのは「子どもとことば遊びをしている」、「ワークブックを子どもにやらせている」だった。子どもの成長に合わせて変化していると思われる。

４．幼児期では、第１子に対して地域とのかかわりが少なく、第２子以降に対して物を使った遊びが少ない

第１子と第２子以降では母親のかかわる頻度に差はみられるだろうか。図表は割愛するが、第１子が第２子以降より多かったのは、「子どもと一緒に絵をかいたり、粘土や折り紙で遊んだりしている（第１子 79.1％＞第２子以降 67.4％）」「子どもとブロックやつみ木などをしている（第１子 73.6％＞第２子以降 58.4％）」、「子どもと知育玩具を使って何か学習するような遊びをしている（第１子 75.0％＞第２子以降 61.7％）」だった。物を使った親子での遊びについては、第１子のほうが第２子以降より多い傾向がみられた。第２子以降の場合、親が第１子とのかかわりもあり、親子で物を使った遊びを一緒に行う時間がとれないことが考えられる。

第２子以降が第１子より多かったのは、「子どもと一緒に地域の行事に参加している（第１子 84.3％＜第２子以降 89.9％）」だった。第１子の場合、地域での行事や催しの情報に気づきにくかったり、行事や催しが行われた後で知ったりすることもある。一方、第２子以降の場合、いつ、どこで、どんな行事が行われるのか、それは子どもにとって楽しめそうなものかといった地域の情報が親に積み上がっており、子どもと一緒に参加できる場合が比較的多くなるのではないかと思われる。

表３－１－２　母親の子どもへの働きかけ（年少児～年長児・学年別）

（%）

		年少児（1,366）	年中児（1,223）	年長児（1,125）
生活習慣・マナー	子どもが夜決まった時間に寝るようにうながしている	96.0	96.6	97.2
	食事のマナーを教えている	96.2	97.3	96.9
	まわりの人に「おはよう」「ありがとう」などのあいさつやお礼をするようにうながしている	99.1	98.5	97.9
	レストランなどの公共の場で子どもがさわぐとき、注意している	99.0	98.7	98.0
	約束していないものは、子どもにせがまれても買わないようにしている	86.9	88.0	89.6
	家で子どもにお手伝いをさせている	86.9	86.5	86.2
体験	子どもと一緒に買い物に行く	97.6	96.5	96.2
	家で季節の行事をしている	95.1	96.1	95.3
	子どもと一緒に地域の行事に参加している	86.6	87.4	87.4
	子どもを動物園や水族館に連れていく	83.4	81.3	81.9
	家族で旅行に行く	73.4	71.1	74.1
	子どもを博物館や美術館に連れていく	26.5	26.0	32.0
思考のうながし	子どもが失敗したとき、励ましのことばをかけている	97.5	97.6	97.3
	子どもの「どうして、なぜだろう」などの質問に答えている	97.2	97.8	96.9
	子どもの質問に対して、自分で考えられるようにうながしている	77.8	78.9	80.5
	子どもと一緒に出かけた後、お互いに感じたことなどを話し合っている	74.0	71.9	70.5
	１つの遊びには多様な遊び方があることを子どもに気づかせようとしている	53.9	54.2	54.8
家庭での学習の支援	家では子ども１人で自分のものを出したりしまったりしやすいように配置している	93.6	91.5	92.2
	子どもが文字や数に興味を示したとき、さらに学べるように環境を整えている	75.4	77.6	76.2
	子どもと一緒に数を数えている	94.2	92.7	89.0
	子どもと一緒に絵をかいたり、粘土や折り紙で遊んだりしている	77.9	72.4	67.3
	子どもとブロックやつみ木などをしている	74.5	64.5	56.0
	子どもとことば遊びをしている	72.3	87.1	91.8
	子どもと知育玩具を使って何か学習するような遊びをしている	72.1	66.0	65.1
	ワークブックを子どもにやらせている	52.8	63.8	77.1
	家で動物を飼ったり、植物を育てたりしている	53.2	54.5	58.7
	携帯ゲーム機を使って文字や数を学習するような遊びをさせている	15.5	19.1	19.1

注１）「よく＋ときどきある」の%。
注２）（　　）内はサンプル数。

５．小１生でも、子どもの生活習慣やルールを守るための働きかけや親子の会話は多い

小１生の母親の子どもへの働きかけは、どのくらいの頻度で行われているだろうか。幼児期と一部の内容が異なる 19 項目について、「よくある」から「ぜんぜんない」までの４段階で回答してもらった。

表３－１－３は、「生活習慣・マナー」「会話」「思考のうながし」「家庭での学習の支援」の４つのカテゴリーごとに並べたものである。小１生の全体的な傾向をみると、幼児期と同様に生活習慣やマナーについての親のかかわりが高い頻度で行われ、母親の９割以上が「よく＋ときどきある」と回答した。小１のみに聞いた「子どもと友だちのことについて話をしている」、「子どもと学校のできごとについて話をしている」、「子どもと勉強のことについて話をしている」などの親子での会話についても、親のかかわりが高い頻度で行われ、母親の９割前後が「よく＋ときどきある」と回答した。日常的に親は子どもに生活習慣やマナーについてうながし、親子で学校や友だちについての会話をしている様子がうかがわれた。

６．子どもが失敗したときの励ましや学習環境を整える頻度は低い

小１生の親の子どもへの思考のうながしはどうだろうか。「子どもがよいことをしたら、ほめるようにしている」と「子どもが失敗したとき、励ましのことばをかけている」は、母親の９割以上が「よく＋ときどきある」と回答した。さらに「よくある」の割合をみていくと、「子どもがよいことをしたら、ほめるようにしている」は 78.8％と高い頻度で行われており、小１生の親にとって、子どもがよいことをしたときにほめる機会が多い様子がうかがえた。一方、「子どもが失敗したとき、励ましのことばをかけている」は 56.3％と 20 ポイント以上の差があった。失敗したときの励ましは、親が子どもの気持ちを受けとめたうえで、子どもに気持ちの切り替えをうながしていくことになる。親にとって、子どもの気持ちをよみとり、対応していくことには、ほめること以上の難しさがあるようだ。子どもが失敗したときにどう励ますかについて、知恵や工夫が求められるように思う。

「子どもと一緒に出かけた後、お互いに感じたことなどを話し合っている」と「子どもの質問に対して、自分で考えられるようにうながしている」については、母親の８割程度が「よく＋ときどきある」と回答した。幼児期でも同様に質問をしているが、とくに出かけた後の話し合いは年少児 74.0％、年中児 71.9％、年長児 70.5％、小１生 81.6％と、年長児から小１で 11.1 ポイント増えていた。

次に、家庭での学習の支援についてみてみよう。小学校からの連絡物や子どもの宿題の確認、勉強を教えることは、母親の９割以上が「よく＋ときどきある」と回答した。一方、「子どもが勉強する場所を整えている」は 76.1％、「家での子どもの勉強の時間帯や長さを決めている」は 49.1％だった。子どもが家庭で学習に取り組むとき、生活リズムの中で学習に集中できるように切り替えるために、場所や時間など環境を整えることも必要に思われる。しかし、本調査の結果からは、親はこの点にあまり注目していない傾向がうかがえた。

表３－１－３　母親の子どもへの働きかけ（小１生）

（%）

		よく＋ときどきある	よくある	ときどきある
生活習慣・マナー	子どもが間違ったことをしたら、しかるようにしている	99.6	83.8	15.8
	まわりの人に「おはよう」「ありがとう」などのあいさつやお礼をするようにうながしている	97.4	78.4	19.0
	食事のマナーを教えている	97.4	66.4	31.0
	子どもが夜決まった時間に寝るようにうながしている	96.3	79.4	16.9
会話	子どもと友だちのことについて話をしている	96.0	56.8	39.2
	子どもと学校のできごとについて話をしている	95.7	61.9	33.8
	子どもと勉強のことについて話をしている	88.0	41.8	46.2
思考のうながし	子どもがよいことをしたら、ほめるようにしている	99.3	78.8	20.5
	子どもが失敗したとき、励ましのことばをかけている	96.4	56.3	40.1
	子どもと一緒に出かけた後、お互いに感じたことなどを話し合っている	81.6	32.7	48.9
	子どもと一緒に遊んでいる	81.4	17.6	63.8
	子どもの質問に対して、自分で考えられるようにうながしている	80.1	22.8	57.3
家庭での学習の支援	小学校からの連絡物（学校だよりや学年だよりなど）を確認している	98.8	90.8	8.0
	子どもの宿題をチェックしている（音読や答え合わせなど）	96.4	78.4	18.0
	子どもに勉強を教えている	91.0	38.6	52.4
	子どもが勉強する場所を整えている	76.1	38.9	37.2
	子どもが学校で勉強している内容を確認している（教科書やノートなどで）	72.8	28.8	44.0
	家での子どもの勉強の時間帯や長さを決めている	49.1	17.6	31.5

注１）サンプル数は 1,285 人。
注２）19 項目のうち、18 項目を図示。

７．母親が専業主婦の場合、子どもが学習する場所や時間を整える頻度が高い

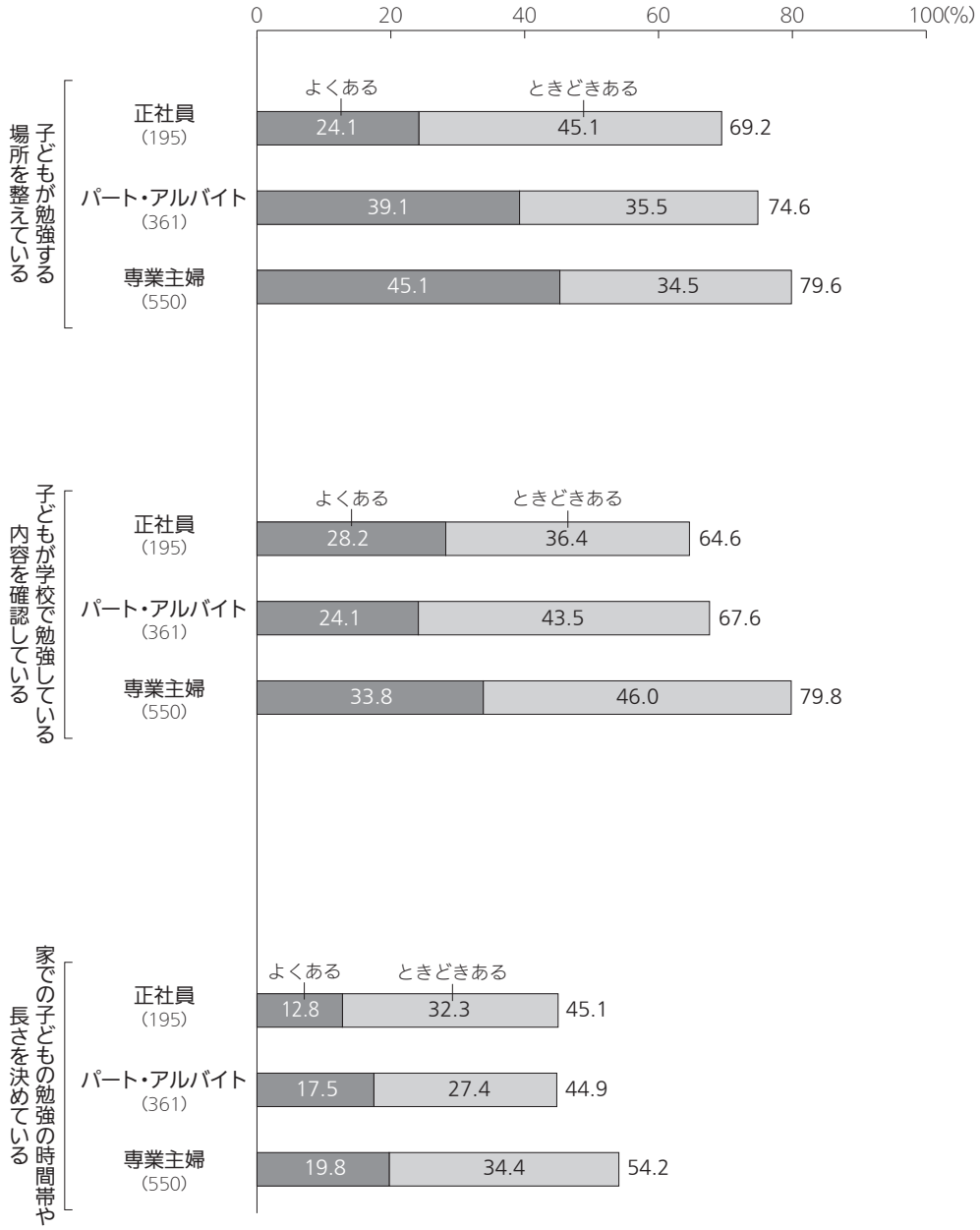
小１生の母親の子どもへの働きかけの頻度に関して、母親の就業状況別に差がみられた３項目をみていこう（**図３－１－１**）。

差がみられたのは「子どもが勉強する場所を整えている」、「子どもが学校で勉強している内容を確認している」、「家での子どもの勉強の時間帯や長さを決めている」だった。これらの項目は家庭での学習の支援のうち、場所や時間など環境を整えたり、内容を確認したりすることだった。母親の就業状況別にみると、「子どもが勉強する場所を整えている」では「よく＋ときどきある」の数値で、正社員 69.2％、パート・アルバイト 74.6％、専業主婦 79.6％と、正社員と専業主婦では 10.4 ポイントの差がみられた。

母親の就業状況による差はどこから生まれるのだろうか。本調査では母親と父親が働いている日に帰宅する時間も聞いている。父親の帰宅時間は母親の就業状況による差がみられるものの、約半数の父親が 20 時台以降に帰宅している（p71 **表４－１－２**参照）。母親の帰宅時間は、母親が正社員の場合、18 時台までに 73.8％、パート・アルバイトの場合、16 時台までに 71.5％が帰宅していた（p9 **図Ｂ－４－２**参照）。

本調査ではそれまでの間、子どもが過ごす場所について聞いてはいないため、別調査「小１ママと子の放課後生活レポート（2009、ベネッセ次世代育成研究所）」を参考にしたい。この調査は、全国の小１生の第１子をもつ母親を対象に 2009 年 12 月に実施したインターネット調査である。これによれば、子どもが下校後から夕食や入浴の時間までの主な居場所と過ごし方について複数回答で聞いたところ、母親が働いている場合、もっとも多かったのが「自宅で過ごす」68.4％、次に「学童保育所で過ごす」42.3％だった。また、祖父母や親せきの家で過ごす子どもも 16.9％いた。（母親が働いていない場合、もっとも多かったのは「自宅で過ごす」96.3％、次に「学習塾や習い事に行く」56.7％。）また、「自宅で過ごす」と回答した人に自宅で子どもが誰と過ごしているかを複数回答で聞いたところ、母親がパートタイム・アルバイトや専業主婦の場合は９割以上が母親自身だったが、母親が正社員の場合は母親自身と祖父母や親せきが同じくらいだった。これらから、母親が専業主婦の場合、子どもと自宅で過ごす時間が多くなり、生活のメリハリとして、学習する場所や時間を区切る必要が出てくるのかもしれない。一方、母親が働いている場合、専業主婦に比べて、子どもが学童保育所、祖父母・親せきの家、自宅で祖父母・親せきと過ごすことが多くなり、母親自身が勉強する場所を整えたり、勉強する時間帯や長さを決めたりする頻度が低くなることが考えられる。いずれの場合でも、家庭で学習に取り組むとき、子ども自身が場所や時間などの環境をどう整えるかについて学ぶ機会が得られるようにすることが必要に思われる。

図３－１－１　母親の子どもへの働きかけ（小１生・母親の就業状況別）



注）（　　）内はサンプル数。

第２節 ＊ 絵本や本の読み聞かせの様子

荒牧美佐子

子どもの学年の上昇にともない、読み聞かせの頻度や時間は減少し、絵本や本を介した親子のかかわりも減っていた。一方、読み聞かせを多く行う家庭では子どもが１人で絵本を読む頻度が高く、母親の読書活動が活発なほど子どもへの読み聞かせを多く行う傾向がみられた。

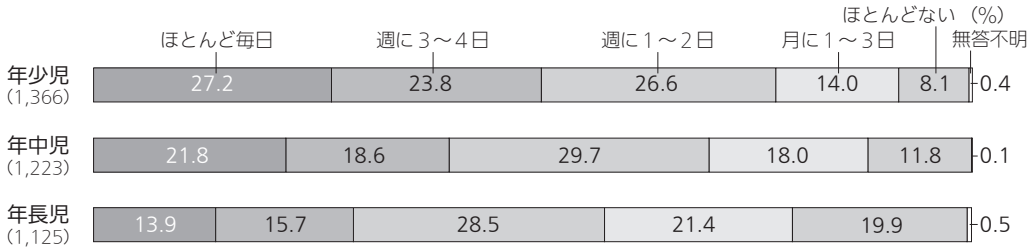
１．第１子は、活発に読み聞かせを行っており、読み聞かせの開始時期も早い

絵本や本の読み聞かせ頻度について、年少児、年中児、年長児の学年別で比較した（**図３－２－１**）。その結果、「ほとんど毎日」「週に３～４日」の頻度で読むという割合は、子どもの学年があがるごとに減少していることがわかった。年長児の約２割の母親は、絵本や本を読み聞かせることが「ほとんどない」と答えており、子どもの学年があがるとともに絵本や本を介した親子のかかわりは減っている様子がうかがえる。

出生順位別に比較すると、こうした傾向は第３子以降において、より顕著であることがわかった。**図３－２－２**は、読み聞かせの頻度と出生順位との関連について分析した結果である。わかりやすくするために、読み聞かせ頻度について「ほとんど毎日」という群と、「ほとんどない」という両極にある２群を比較した結果を示した。どの出生順位でも、学年があがるとともに「ほとんど毎日」読み聞かせを行っている割合が減少する一方で、読み聞かせを行うことが「ほとんどない」という割合が上昇した。出生順位別にみると、第１子では年長児でも、「ほとんど毎日」読み聞かせる割合が 18.7％であり、「ほとんどない」という群とほぼ同数だった。しかし、第３子以降になると、年少児であっても「ほとんど毎日」という割合は 14.5％と第１子の年長児よりも少なかった。また、第３子以降の場合、年長児になるとその割合はわずか 7.0％にとどまり、反対に「ほとんどない」と答えた割合が 25.4％と約４分の１を占めている。つまり、出生順位が低いほど、親子の絵本や本と介したかかわりは少ないといえる。

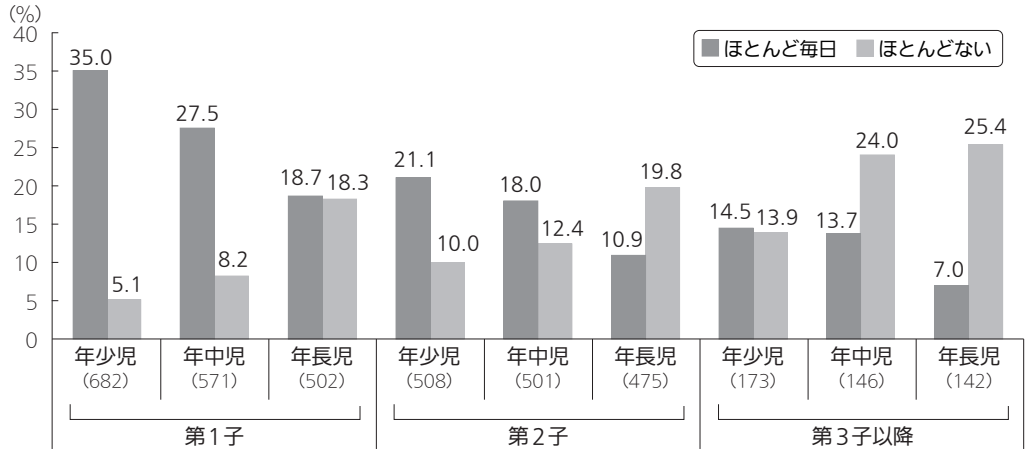
図３－２－３は、読み聞かせの開始時期と出生順位との関連を分析した結果である。これをみると、どの出生順位でも「7 か月～１歳頃」に読み聞かせを開始している割合がもっとも高かった。出生順位別にみると、第１子は第２子や第３子以降の群よりも「生後すぐ～６か月頃」に開始している割合が高く、約３分の１があてはまった。一方、第３子以降では 11.4％が「３歳頃」になって読み聞かせを始めており、その割合は第１子や第２子に比べて高かった。つまり、出生順位の低い子どもは、読み聞かせの頻度が低いだけでなく、開始時期も遅くなる傾向にある。また、詳細については後述するが、こうした親のかかわりの違いは、子ども自身の読書活動にも影響しており、子どもが１人で絵本や本を読むことがあるかどうかという質問に対して、第１子では「ほとんど毎日」という割合が 36.2％となっているが、第２子では 31.7％、第３子以降では 27.3％となっている。

図３－２－１　読み聞かせ頻度（年少児～年長児・学年別）



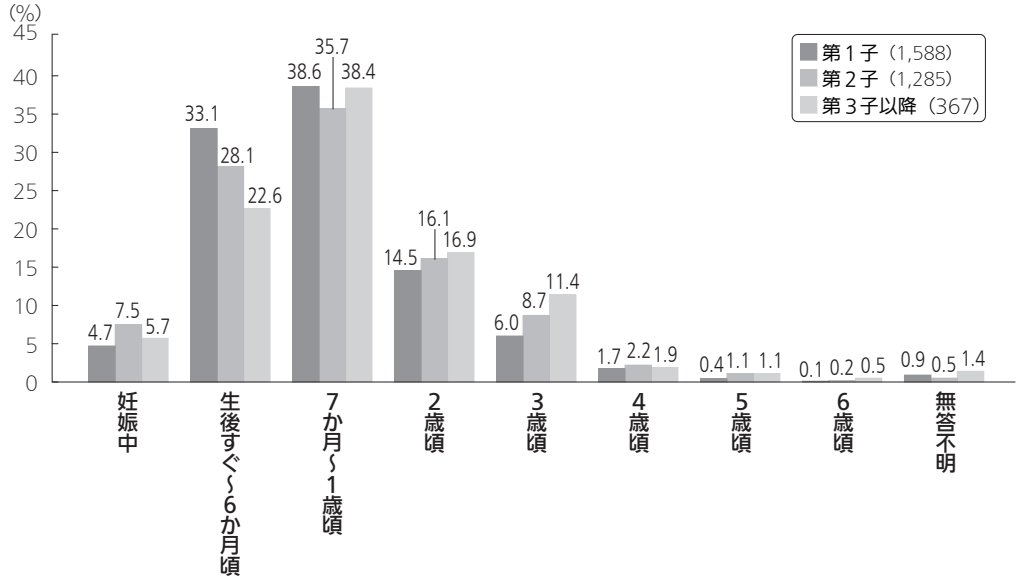
注）（　　）内はサンプル数。

図３－２－２　読み聞かせ頻度（年少児～年長児・出生順位別）



注）（　　）内はサンプル数。

図３－２－３　読み聞かせ開始時期（年少児～年長児・出生順位別）



注１）読み聞かせを行っていると回答した母親のみ分析。
注２）（　　）内はサンプル数。

２．親の読書活動が活発なほど、子どもへの読み聞かせ頻度も高い

続いて**図３－２－４**は、絵本や本の読み聞かせの頻度と親の読書活動との関連を示したものである。親の読書活動の指標として、マンガや雑誌、子どもの絵本や図鑑を除いた本が家庭にどのくらいあるかをたずねた。その結果、「本はほとんどない」という群では、絵本の読み聞かせをすることが「ほとんどない」という割合がもっとも高く24.6％となっている。一方で、蔵書の数が多くなるほど、読み聞かせ頻度も高くなる傾向にあり、「100冊以上」という群では、「ほとんど毎日」読み聞かせるという割合が28.9％を占め、他群よりも高い。つまり、親自身の読書活動が活発であるほど、子どもへの読み聞かせ行動も多くなる傾向にあることがわかった。

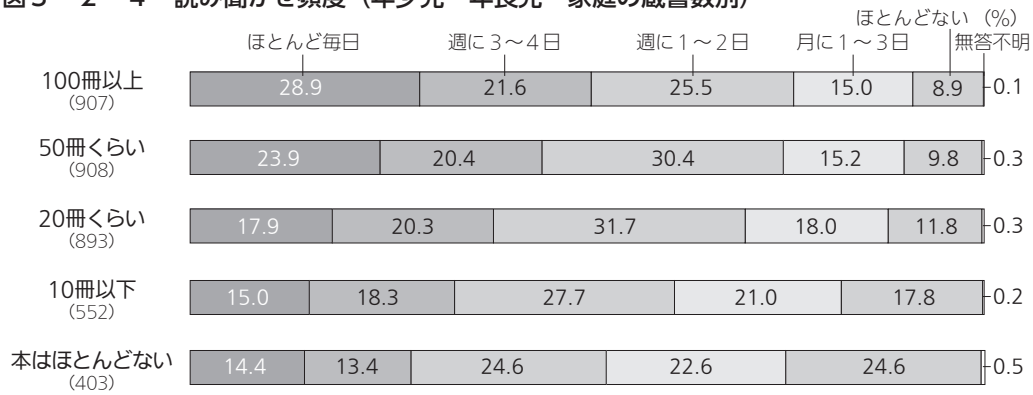
また図表は割愛するが、家庭の蔵書数が少ないほど、「子どもと一緒に図書館に行くことはほとんどない」と答える割合が高くなっており、親自身の読書活動は絵本の読み聞かせだけではなく、子どもが本や絵本とふれ合う機会をどのくらいもてるかにも影響を与えているといえる。

３．絵本を介した母子双方向のやりとりは、子どもの学年の上昇とともに減少する

図３－２－５は読み聞かせのときの母親の様子、**図３－２－６**は子どもの様子をまとめたものである。母親の様子については、「絵本の文字をそのまま読む」、「登場人物によって、声を変えて読む」など５つの項目に対して、あてはまるものをすべて選んでもらった。同様に、子どもの様子についても「静かに聞いている」「絵をみつめたり、指さしたりしている」など９項目からあてはまるものをすべて選んでもらった。

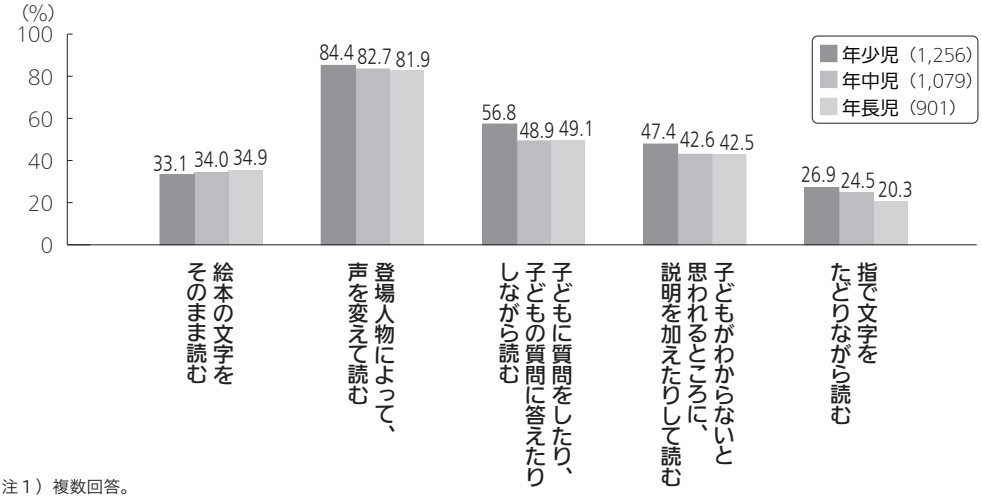
まず、母親の様子について、子どもの学年にかかわらず、「絵本の文字をそのまま読む」が３割程度にとどまっているのに対し、８割以上の母親が「登場人物によって、声を変えて読む」と答えていることから、読み聞かせの際には、情感を込めて読んでいる母親が多いことがうかがえる。そのほか、「子どもに質問をしたり、子どもの質問に答えたりしながら読む」と「子どもがわからないと思われるところに、説明を加えたりして読む」にあてはまると答えている割合は年少児では約５割だが、子どもの学年があがるとともに、減少する傾向にある。いずれも子どもと対話しながら読む様子を示しており、読み聞かせ時におけるこういったやりとりは、子どもの学年が低いときのほうが多かった。これは、**図３－２－６**に示すとおり、「絵本の内容について、質問しながら聞いている」という子どもの割合が学年とともに減少していることとも一致している。また、子どもの様子については、「静かに聞いている」の割合が学年とともに上昇し、「先のことを知りたくて、次のページをめくろうとする」の割合が減少していることなどから、絵本を読んでもらう際の構えが徐々に整い、落ち着いて聞くことができるようになる一方で、「『もう１回』と繰り返して読んでほしがる」割合が少なくなることから、自分１人で読むことが増えていく可能性が考えられる。

図３－２－４　読み聞かせ頻度（年少児～年長児・家庭の蔵書数別）



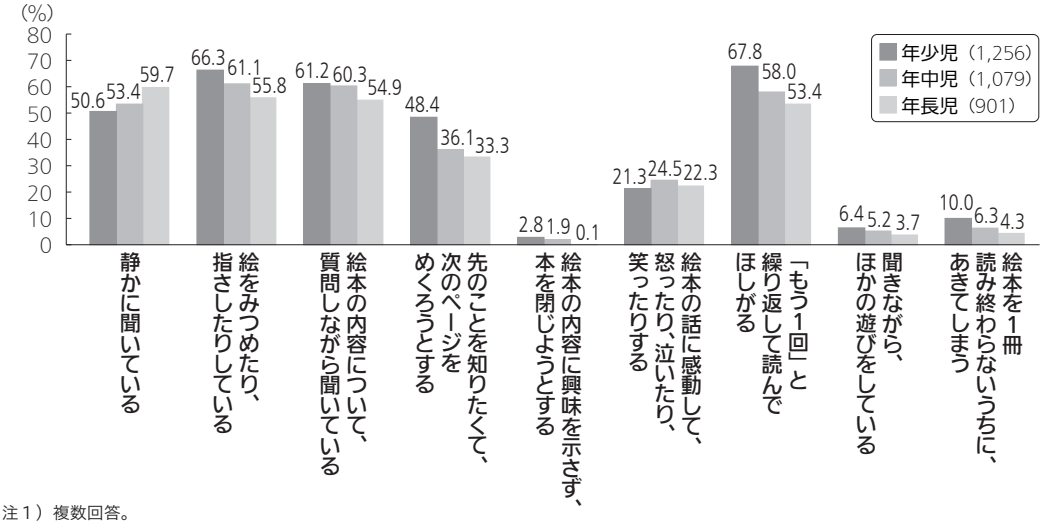
注）（　　）内はサンプル数。

図３－２－５　読み聞かせ時の母親の様子（年少児～年長児・学年別）



注１）複数回答。
注２）読み聞かせを行っていると回答した母親のみ分析。
注３）（　　）内はサンプル数。

図３－２－６　読み聞かせ時の子どもの様子（年少児～年長児・学年別）



注１）複数回答。
注２）読み聞かせを行っていると回答した母親のみ分析。
注３）（　　）内はサンプル数。

４．子どもへの読み聞かせ頻度が高く、時間が長いほど、子どもの１人読みの頻度も高い

そこで、子どもの１人読みの頻度が学年によってどう変化するかを**図３－２－７**に示した。これをみると、子どもの学年があがるからといって、必ずしも１人読みの頻度が上昇するわけではないことがわかる。むしろ年少児では、36.6％の子どもが「ほとんど毎日」１人読みをしているが、年中児では31.6％、年長児では31.0％とやや減少している。反対に「月に１～３日」の割合は、年少児では6.9％だったのが、年中児では8.7％、年長児では10.7％と少し増加している。

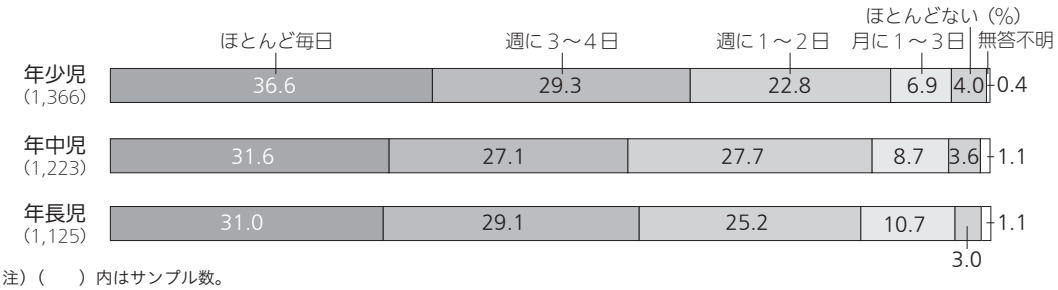
ここまでの結果から、子どもの学年の上昇とともに、母親による絵本や本の読み聞かせの頻度や１日あたりの時間が減少していくことがわかったが、親子のかかわりが子どもの１人読みの頻度とどのように関連しているのだろうか。

図３－２－８は、母親による絵本や本の読み聞かせ頻度と子どもの１人読みの頻度との関連を示したものである。ここから、「ほとんど毎日」読み聞かせを行っている群では、半数以上の子どもが「ほとんど毎日」１人でも絵本を読んでいる様子がうかがえる。そして、この割合は、親子の読み聞かせの頻度がさがるほど減少していく。ただし、１人読みの頻度が「月に１～３日」あるいは「ほとんどない」という、いわば、絵本や本に触れることが極端に少ない群の割合が急激に増加するのは、「週に１～２日読み聞かせる」と「月に１～３日読み聞かせる」の間においてである。「週に１～２日読み聞かせる」群では、絵本や本を１人読みする頻度が月に１～３日以下の子どもの割合が10％に満たないのに対し、「月に１～３日読み聞かせる」群ではその２倍以上となっている。つまり、読み聞かせを毎日は行えなくても、少なくとも週に１～２日できるかどうかがひとつのポイントとなるようである。

次に、**図３－２－９**は、１日あたりの平均読み聞かせ時間と子どもの１人読みの頻度との関連をまとめたものである。読み聞かせの時間については、調査時を起点とし、「先週１週間の中で、１日平均、どれくらい読み聞かせをしていたか」をたずねている。分析の結果、**図３－２－８**と同様、読み聞かせ時間が長く、つまり、絵本や本を介した母親とのかかわりが多いほど、子どもの１人読みの頻度も高くなることがわかった。１日あたり「１時間以上」あるいは「30分～１時間未満」とじっくりと時間をかけて読み聞かせをしている家庭では、半数以上の子どもが「ほとんど毎日」１人読みを行っている。

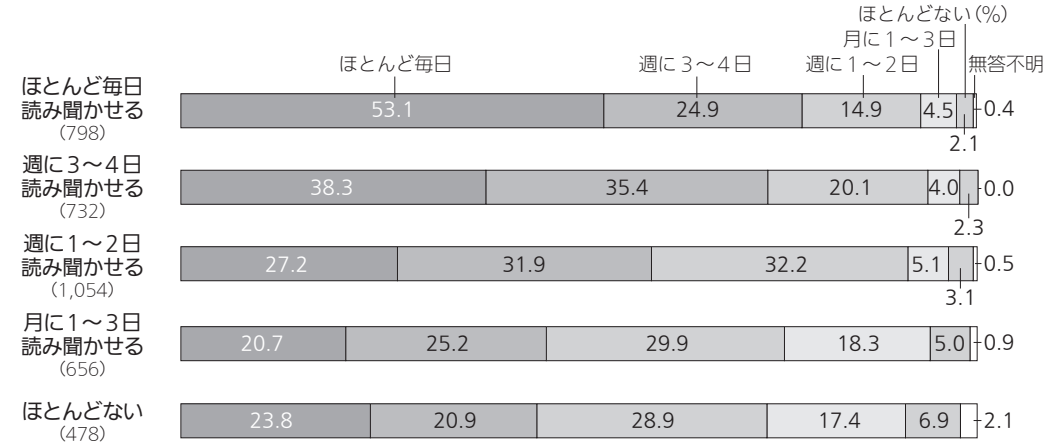
以上をふまえたうえで、親による絵本や本の読み聞かせの頻度や時間をどれくらい行うのが適切であるかを断定するのは難しいが、無理をして毎日長時間行わなくとも、常に絵本が子どもの手の届くところにあるようにすること、そして、子どもが絵本に注意を向けられるよう、週に数回、１回あたり15分程度でも親子で絵本や本にかかわることを心がけることなどが大切かもしれない。

図３－２－７　子どもの１人読み頻度（年少児～年長児・学年別）



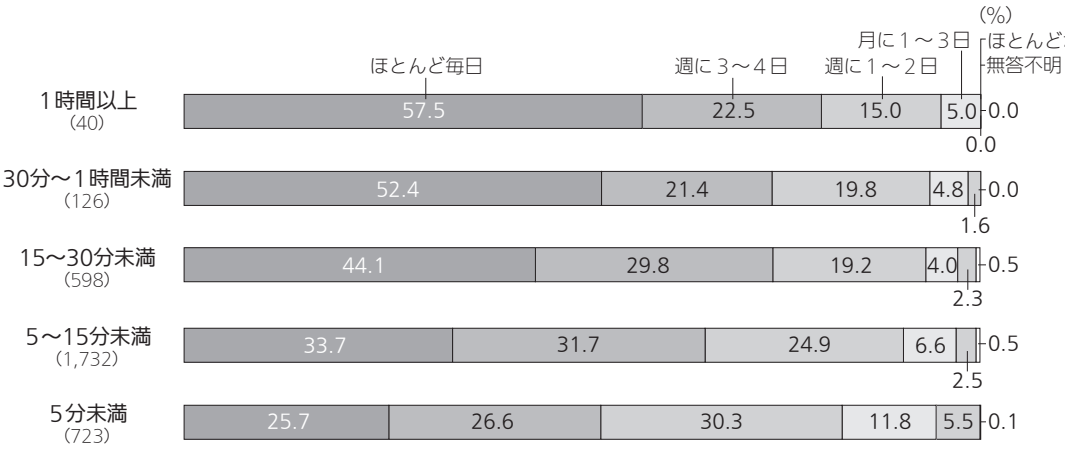
注）（　　）内はサンプル数。

図３－２－８　子どもの１人読み頻度（年少児～年長児・読み聞かせ頻度別）



注）（　　）内はサンプル数。

図３－２－９　子どもの１人読み頻度（年少児～年長児・1日あたりの平均読み聞かせ時間別）



注）（　　）内はサンプル数。

第３節 ＊ 幼児期の親の期待と小１での振り返り

田村徳子

幼児期の母親の９割以上が小学校に入学するまでに生活習慣や学びに向かう力を身につけてほしいと思っており、小１生の母親が小学校入学までに身につけてほしいことは「あいさつやお礼を言える」「えんぴつを正しく持てる」だった。

幼児期の母親は、子どもが小学校に入学するまでにどのようなことを身につけておいてほしいと思うのだろうか。また、小１生の母親は、振り返って小学校入学までにどのようなことをしておいたほうがよかったと思っているだろうか。

１．母親の９割以上が、小学校に入学するまでに身につけてほしいと思うことは、生活習慣や学びに向かう力

幼児期の母親が子どもに小学校に入学するまでに身につけておいてほしいと思うことをみていこう。本調査では、第２章第１節で述べた子どもの生活習慣や学びに向かう力に関する 26 項目について、母親の意識を「必ず身につけてほしい」から「まったく身につけなくてもいい」までの４段階で回答してもらった。

表３－３－１は、母親の意識で「必ず＋まあ身につけてほしい」と、子どもの様子の「とても＋まああてはまる」との差を比べたものである。図表は割愛するが、全体的な傾向として、どの学年でも、すべての項目に対して母親の９割以上が「必ず身につけてほしい」あるいは「まあ身につけてほしい」と回答した。一方、子どもの様子は学年によりできる割合が異なるため、年少児では母親の意識と子どもの様子の差は大きく、学年があがるにつれて、多くの項目でその差は縮まっていた。

その中でも、すべての学年で母親の意識と子どもの様子に 30 ポイント以上の差がみられたのは「好き嫌いなく食事ができる」（母親の意識と子どもの様子の差は、年少児 43.7%、年中児 38.5%、年長児 33.7%）「どんなことに対しても、自信をもって取り組める」（母親の意識と子どもの様子の差は、年少児 39.3%、年中児 36.1%、年長児 32.9%）、「夢中になっていることでも、時間がくれば、次のことに移ることができる」（母親の意識と子どもの様子の差は、年少児 37.1%、年中児 34.2%、年長児 31.2%）だった。

２．母親の属性による差はみられない

母親の属性によって、子どもへの期待は異なるだろうか。本調査の結果では、母親の年代や就業状況、学歴による差はとくにみられなかった（図表は割愛）。どの母親も同様に、子どもが小学校に入学するまでに身につけてほしいと願っている傾向がうかがえた。

表３－３－１　小学校入学までに身につけてほしいこと―母親の期待と子どもの様子の差（年少児～年長児・学年別）

（%）

	年少児（1,366）	年中児（1,223）	年長児（1,125）
好き嫌いなく食事ができる	43.7	38.5	33.7
どんなことに対しても、自信をもって取り組める	39.3	36.1	32.9
夢中になっていることでも、時間がくれば、次のことに移ることができる	37.1	34.2	31.2
家で遊んだ後、片付けができる	29.8	27.3	29.4
物事をあきらめずに、挑戦することができる	42.0	34.1	29.2
自分でしたいことがうまくいかないときでも、工夫して達成しようとすることができる	42.3	32.4	27.9
一度始めたことは最後までやり通せる	40.9	32.7	26.1
友だちと意見が違っても、自分の考えを主張することができる	23.5	21.8	25.5
人の話が終わるまで静かに聞ける	30.3	25.5	21.6
食事が終わるまで、席に座っていられる	33.1	23.5	19.2
脱いだ服を自分でたためる	33.7	24.5	17.8
自分がやりたいと思っても、人のいやがることはがまんできる	29.3	18.9	15.9
困ったことがあったら、まわりの人に助けを求めることができる	15.0	12.8	15.3
人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる	22.8	16.4	13.8
遊びを中断されても、時間をおいて続けられる	24.4	17.2	13.5
友だちからいやなことをされたら、「いや」「やめて」などと言える	16.2	12.4	13.4
夜、決まった時間に寝ることができる	13.7	13.9	11.5
自分が何をしたいかを言える	8.0	7.2	10.0
遊ぶとき、「入れて」「一緒に遊ぼう」「貸して」など友だちに声かけができる	13.2	7.4	8.3
まわりの人に「おはよう」「さようなら」「ありがとう」などのあいさつやお礼を言える	9.6	8.9	7.8
友だちとけんかをしても、あやまるなどして仲直りができる	16.5	9.5	7.7
ほしいもの、してほしいことを大人に頼める	4.1	5.3	7.0
ルールを守りながら遊べる	12.5	8.4	5.1
遊びなどで友だちと協力することができる	11.8	6.5	4.8
１人でトイレでの排泄、後始末ができる	17.3	9.5	4.7
遊びなどで順番が回ってくるまで待てる	11.6	6.6	4.3

注１）母親の期待「必ず＋まあ身につけてほしい」と子どもの様子「とても＋まああてはまる」の差の％。
注２）（　　）内はサンプル数。

３．振り返って小学校入学までに身につけてほしいことは、あいさつやお礼を言える、えんぴつを正しく持てる

小１生の母親は、振り返って小学校入学までにどのようなことをしておいたほうがよかったと思っているだろうか。本調査では生活習慣や学びに向かう力に関する 18 項目と、文字・数・思考に関する 11 項目について、それぞれみていきたい。

図３－３－１は、生活習慣や学びに向かう力に関する 18 項目について「今、振り返ってみると、お子さまが小学校に入学するまでに、身につけておいたほうがよかったと思うこと」を３つまで選んでもらった結果である。多かった順に「まわりの人に『おはよう』『さようなら』『ありがとう』などのあいさつやお礼を言える」36.4%、「物事をあきらめずに、挑戦することができる」31.1%、「人の話が終わるまで静かに聞ける」27.5%、「人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる」23.1% だった。母親があいさつやお礼を重視している傾向がうかがえる。加えて、挑戦する、人の話を聞けるなど小学校での授業に参加し学ぶときに必要となる力が上位にあがった。

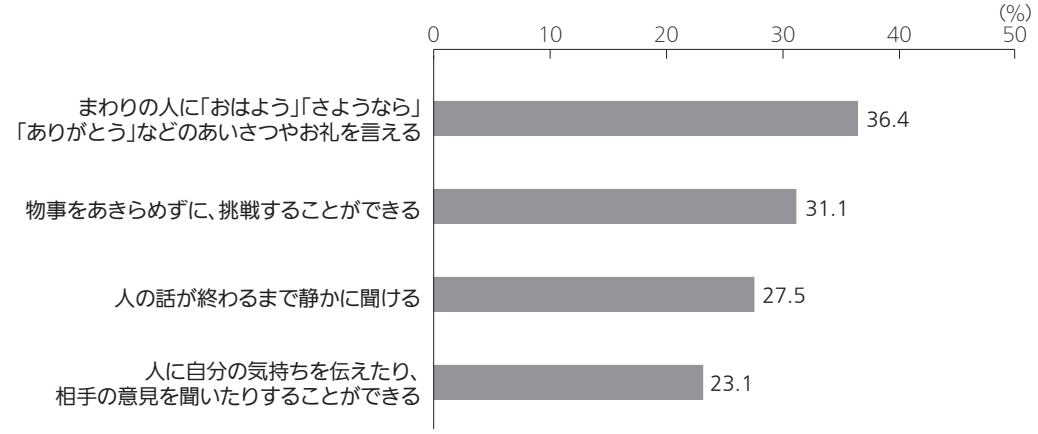
図３－３－２は、文字・数・思考に関する 11 項目について、同様に、子どもが小学校に入学するまでに、身につけておいたほうがよかったことを３つまで選んでもらった結果である。多かった順に「えんぴつを正しく持てる」44.6%、「かな文字を読める」31.1%、「自分の名前をひらがなで書ける」30.5%、「自分の名前を読める」22.9% だった。えんぴつが正しく持てる、かな文字が読めるなど、小学校での日常的な学習生活に必要なスキルが上位にあがった。

４．第２子以降の母親のほうが、あいさつやお礼、えんぴつを正しく持てることを身につけておいたほうがよかったと思っている

第１子と第２子以降で、母親が振り返って身につけてほしいことに差がみられるだろうか。

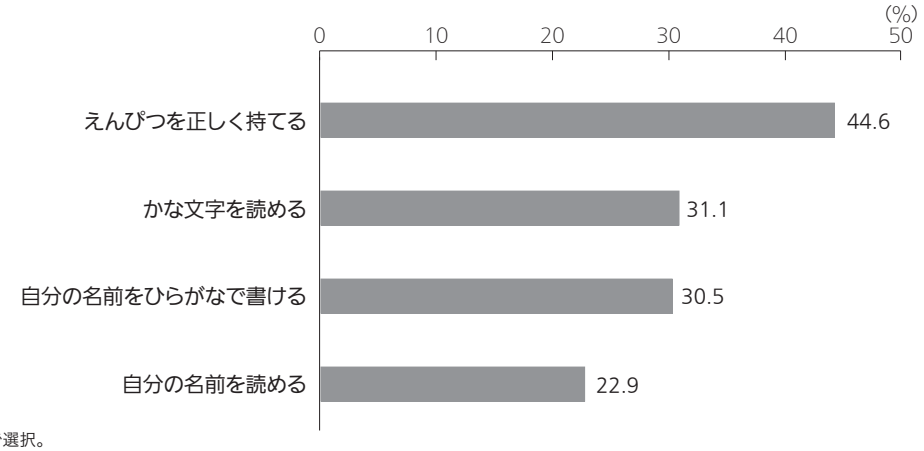
図３－３－３は、第１子と第２子以降を比べて５ポイント以上、差のみられたものである。どの項目も第２子以降のほうが第１子より多い傾向がみられ、「まわりの人に『おはよう』『さようなら』『ありがとう』などのあいさつやお礼を言える」（第１子 33.7％＜第２子以降 38.7％）、「えんぴつを正しく持てる」（第１子 41.0％＜第２子以降 47.7％）、「自分の名前を読める」（第１子 19.6％＜第２子以降 25.8％）だった。これらの３つの項目について、第１子と第２子以降で子ども自身に差はあるのだろうか。「まわりの人に『おはよう』『さようなら』『ありがとう』などのあいさつやお礼を言える」については現在できているか、また「えんぴつを正しく持てる」「自分の名前を読める」については小学校入学までにできたかをみてみたところ、第１子と第２子以降に特徴的な差はみられなかった。第２子以降の母親にとって、「あいさつやお礼を言える」「えんぴつを正しく持てる」「自分の名前を読める」は子どもが小学校生活を送るうえで必要とより強く思うことなのだろう。

図３－３－１　小学校入学までに身につけてほしいこと－生活習慣・学びに向かう力（小１生）



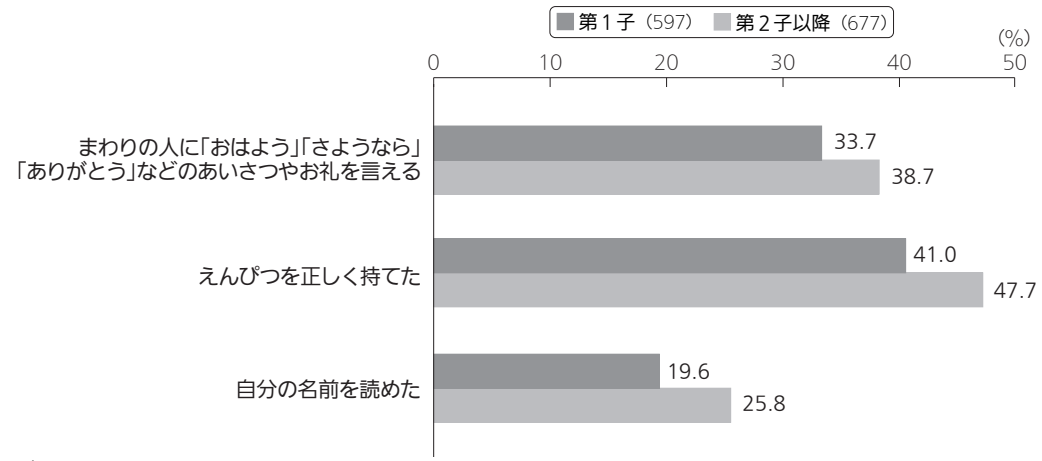
注１）３つまで選択。
注２）18 項目のうち、上位４項目を図示。

図３－３－２　小学校入学までに身につけてほしいこと－文字・数・思考（小１生）



注１）３つまで選択。
注２）11 項目のうち、上位４項目を図示。

図３－３－３　小学校入学までに身につけてほしいこと（小１生・出生順位別）



注１）３つまで選択。
注２）（　　）内はサンプル数。

第４節 ＊ 子どもの学びの育ちと母親のかかわり

田村徳子

年長児でみた場合、子ども自身が考えられるようにうながす親の働きかけと、子どもの学びに向かう力、文字・数・思考には関連がみられる。

子どもの学びに向かう力や文字・数・思考を培うのに、親のかかわりは関係しているだろうか。子どもの学年によってできることに差が出るため、この節では年長児についてみていきたい。

１．親の子ども自身が考えられるようにうながす働きかけと、子どもの学びに向かう力、文字・数・思考には関連がみられる

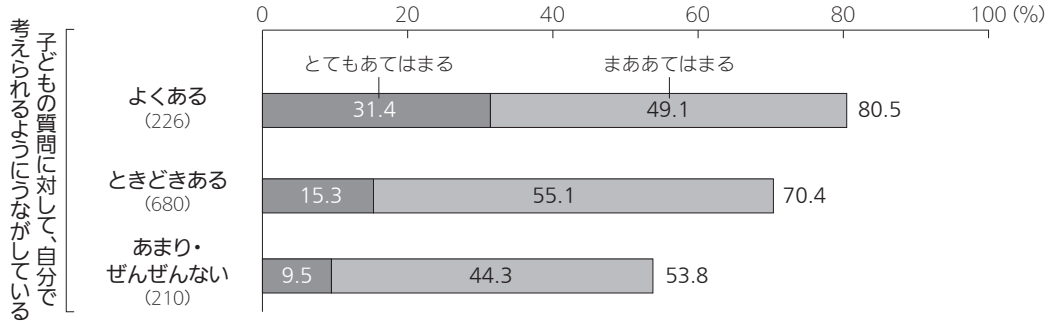
第１節でみてきたように、母親は生活習慣やマナーについて働きかける頻度が高い一方、思考のうながしはやや低い傾向がみられた。そこで、子どもに思考をうながす働きかけの項目「子どもの質問に対して、自分で考えられるようにうながしている」について、「よくある」「ときどきある」「あまり・ぜんぜんない」の頻度別に分けてみたとき、子どもの学びの様子に差があるかをみていきたい。

図３－４－１～２は、子どもの自己主張や自己抑制、協調性、好奇心にかかわる“学びに向かう力”についてみたものである。**図３－４－１**をみると、「物事をあきらめずに、挑戦することができる」割合は、「とても＋まああてはまる」で、親の思考をうながす頻度別に「よくある」80.5％、「ときどきある」70.4％、「あまり・ぜんぜんない」53.8％だった。また、**図３－４－２**をみると、「人の話が終わるまで静かに聞ける」割合は、同様に「よくある」81.4％、「ときどきある」78.5％、「あまり・ぜんぜんない」71.9％だった。学びに向かう力は親の子ども自身の思考をうながす頻度がよくある場合とあまり・ぜんぜんない場合で差がみられた。

図３－４－３～４は子どもの幼児期から小学校段階での学習にかかわる“文字・数・思考”についてみたものである。**図３－４－３**をみると、「指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができる」割合は、「とても＋まああてはまる」で、親の思考をうながす頻度別に「よくある」90.7％、「ときどきある」89.5％、「あまり・ぜんぜんない」73.8％だった。また、**図３－４－４**をみると、「自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる」割合は、親の思考をうながす頻度別に「よくある」91.2％、「ときどきある」87.8％、「あまり・ぜんぜんない」72.8％だった。文字・数・思考についても、同様の傾向だった。

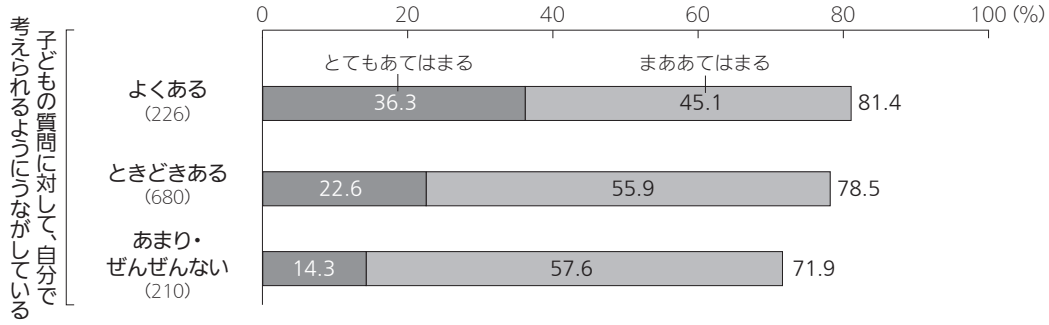
本調査では、親の子ども自身が考えられるようにうながす働きかけと、子どもの学びに向かう力、文字・数・思考には関連がみられる結果となった。

図３－４－１　物事をあきらめずに、挑戦することができる（年長児・親のかかわり別）



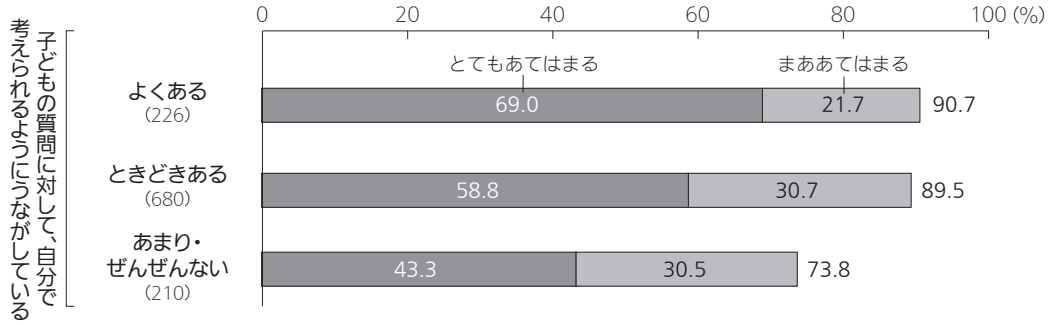
注）（　　）内はサンプル数。

図３－４－２　人の話が終わるまで静かに聞ける（年長児・親のかかわり別）



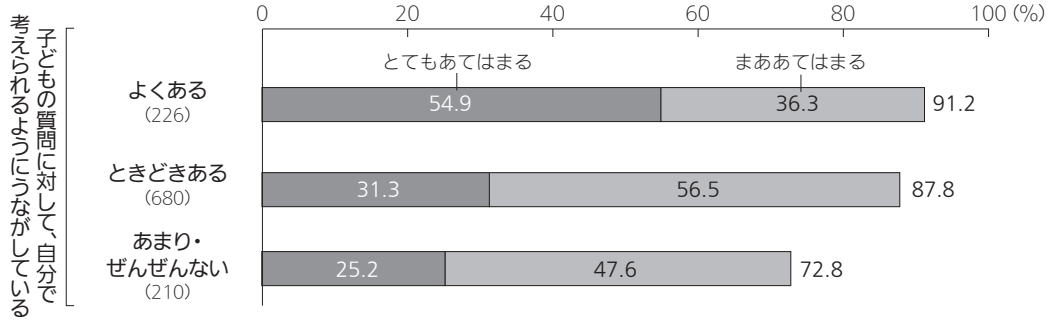
注）（　　）内はサンプル数。

図３－４－３　指やおはじきなどを使って、数を足したり、引いたりすることができる（年長児・親のかかわり別）



注）（　　）内はサンプル数。

図３－４－４　自分のことばで順序をたてて、相手にわかるように話せる（年長児・親のかかわり別）



注）（　　）内はサンプル数。

コラム

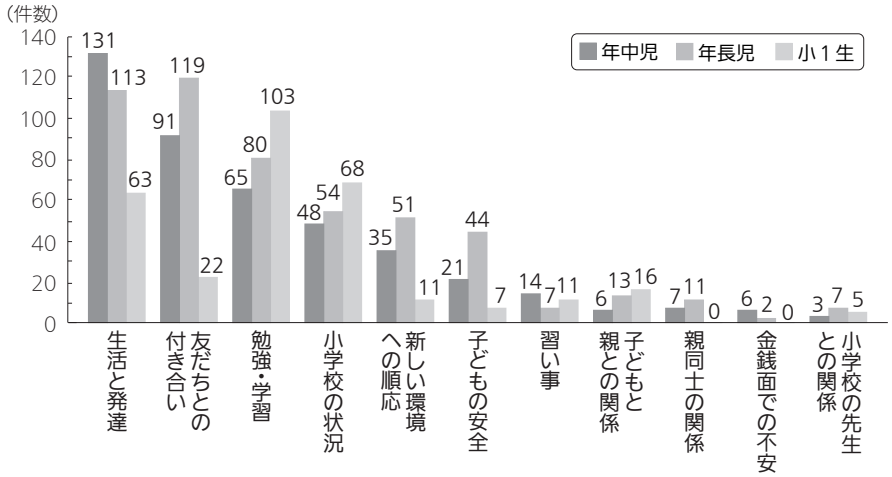
母親の自由回答からみえてきた小学校入学前後の気がかり

小学校入学前後の時期、保護者はどのようなことを気がかりに思っているだろうか。年中児と年長児の母親に、子どもが小学校に入学するにあたっての気がかりなことや悩みを聞き、自由に回答してもらった。また、小１生の母親には子どもの小学校での学習生活についての気がかりなことや悩みを聞き、同様に自由に回答してもらった。それを 11 のカテゴリーに分類した（１人で複数の意見を記述していることが多いため、延べ件数で集計している）。

学年別にもっとも件数が多かったのは、年中児で「生活と発達」、年長児で「友だちとの付き合い」、小１生で「勉強・学習」だった。年中児、年長児、小１生と子どもが成長するにしたがって減るのは「生活と発達」、増えるのは「勉強・学習」「小学校の状況」に関する回答だった。また、年長児がピークになるのは、「友だちとの付き合い」「新しい環境への順応」「子どもの安全」に関する回答だった。

調査は１～２月に行われたので、年長児の場合、小学校入学直前の学校説明会が行われる時期にあたり、小学校生活で子どもが友だちとうまくやっていけるのか、新しい環境になじめるか、登下校の安全はどうかなどを気がかりに思う時期だったこともあるだろう。一方、この時期、小１生は小学校生活を約 10 か月過ごしており、子どもが安全に登下校し、新しい環境になじんで、仲良しの友だちもいる姿をみて、気がかりに思うことが少なくなるのかもしれない。

小学校入学に向けて／小学校生活での気がかり・悩み（自由回答）



以下、多くあげられた項目についての傾向をみよう。

◆生活と発達

年中児でもっとも件数が多く、特徴として偏食、言葉の不安、生活リズム、落ち着きのなさ、コミュニケーションへの気がかりなど、内容が多岐にわたった。年長児になると、偏食と生活リズムに関する回答がみられた。偏食は、好き嫌いが多い、食が細い、アレルギーがあるなどで、「家庭でも子どもに話しているが、給食をどう乗り越えるか心配」という回答が多くみられた。

◆友だちとのかかわり

年中児で２番目に、年長児でもっとも件数が多く、「おとなしく積極性に欠けるので、担任の先生や友だちとうまく関係を築いていけるのか心配（年中･女子)」など、うまく遊べるか、友だちをつくれるか、いじめへの不安に関する内容があがった。小１生でも「同じ幼稚園の子が少ないためか、まだ友だちとうまく遊べないのか、あまり学校が好きではないようです（小１・男子)」などの声が寄せられた。

◆勉強や学習

年長児で、「授業についていけるか」とのみ書かれることが多く、入学時点での能力については「どの程度まで読み書きや理解があればよいのか。生活面もどの程度までできればよいのか目安がわからない（年長･男子)」や「小学校の先生のお話で、自分の名前の読み書きができればよいと知り安心した（年長・男子)」などの声が寄せられた。

小１生では、「毎日適度な宿題があるが、なかなか自発的にこなすことができないので、学校では大丈夫なのかなぁと思うことがある（小１・女子)」や「勉強が大嫌いで、宿題も無理にさせようとすると泣いてあばれる。字もきたなく、もう少し勉強を好きになってほしい（小１・男子)」など、宿題への取り組みの様子を気がかりに思う声がみられた。また、家庭で学習しないことや、読み書きの習得への不安についてもあがった。

◆小学校について

教育方針について、「１年生で６校時までの授業の場合、集中力がもたずあまりよくないと感じている。放課後に遊べる時間もあまりとれない（小１・男子)」など、時間数についての疑問があがった。先生の指導の質については、授業での教え方や宿題の量に加え、「先生は子どもの悪い所ばかりを探して、よい所をみてくれない。まだ１年生なのだから、もう少し広い心で、子どもに接してほしい（小１・男子)」や「小学校生活で担任の言葉の影響は大きいと思う。１年生に対する言い方、６年生に対する言い方をきちんと成長段階を考えて発言してほしい（小１･男子)」など、小１生の発達に合わせて丁寧にみてほしいという声が寄せられた。